

石見の領主と戦国大名～益田氏らと毛利氏～

島根県古代文化センター 目次 謙一

1. 益田元祥、徳川家康の誘いを断る

■慶長5年(1600)、関ヶ原の戦い後の状況

勝利した徳川家康が敗れた石田三成らの所領を、与した大名や家臣へ分け与えた毛利輝元は石見国など領国の大半を失い、周防・長門2か国のみとなった輝元家臣益田元祥(もとよし)は石見国の所領10,000石余から退去を迫られた

■徳川家康が益田元祥を大名に取り立てたいと誘った【1】

家康「石見国に残り私に仕えるなら、昔からの所領は全て与える(大名にする)」
元祥「毛利輝元はしばらく家臣を抱えられない。私は毛利家の昔からの家臣ではなく、石見国の者なので、お仕えすべきかもしれない」

元祥「近年輝元から多くの所領をいただきありがたいので、お仕えする覚悟だ」

家康「石見国の所領より、長門国の新しい所領はずっとよいのだろうか」

- ・家康家臣大久保長安は石見国を訪れ、益田元祥のものの所領を視察した
長安「元祥の石見国の所領は多く、並ぶ者がいないほど」「元祥の忠義は篤い」
- ・大久保長安からこのことを聞いた毛利輝元は、益田元祥へ1,000石を与えた
元祥「今の長門国の検地の基準で言えば、もとの石見の所領は7,8万石だ」
- ・寛永2年(1625)元祥の跡を継いだ益田元堯の所領は11,000石であった
- ・家臣の所領は1/5削減と決まるなか、元祥は特別に所領維持の扱いを受けた

■益田元祥(1558-1640)はどのような人物か？

甲冑を着け騎乗する肖像画、重要文化財《益田元祥像》(島根県立石見美術館蔵)
鞍の下に虎の皮が描かれている

永禄11年(1568)益田藤兼・元祥父子は毛利元就へ虎の皮を贈った

益田氏は対外交易を介して虎の皮を入手した=経済的豊かさの表れ

画家は狩野松栄(直信、源七)(1519-1592)

天才絵師狩野永徳の父、肖像画は少なく貴重、益田元祥の生前の作

京都画壇の第一人者に依頼できる人脈を益田氏は得ていたと推測される

⇒ この肖像画から益田氏の経済力と文化的素養の一端がうかがえる

■益田元祥の政治力の由来はなにか？

徳川家康が大名格に評価した、益田元祥の政治力の基盤・背景を探ってみよう

⇒ 第20代当主の益田元祥に至る、益田氏のあゆみと歴史的背景をたどる

⇒ 石見国の他の領主や大名毛利氏との関係等から、益田氏の性格を考える

2. 益田氏の歴史と石見の領主たち

■石見国には益田氏ら多くの領主たちがいた

石見国は大きな平野が分散して存在し、山間部には盆地が点在する山がちな地形
内陸部と沿岸部とを結ぶ陸路や河川が、物流・交流・戦いの舞台となった
平野や盆地ごとに多くの領主が並び立ち、上位の大名が勢力を広げづらかった

■益田氏の歴史をふりかえる

御神本兼高は鎌倉幕府から石見国那賀郡・美濃郡を中心に広い所領を認められた
兼高の長子兼季の系統が益田を本拠とし、益田氏を名乗った

兼高の子の代から三隅氏・福屋氏、孫の代から周布氏が分かれた

南北朝時代の兼見は、永徳3年(1383)益田氏一族の結束や寺社の保護を定めた

■益田氏と領主たちは盟約を結び領主連合をつくった

領主同士で婚姻関係を積み重ね、相互に助けあう盟約を交わして関係を深めた
幕府や大名への対抗から、家臣・所領紛争の解決、軍事協力が盟約に期待された
応永12年(1405)福屋・周布・三隅・益田・吉見各氏が盟約を結んだ

＝ 幕府への訴訟の対応について神に誓う契約文書を互いに交わした

⇒ 領主間で連携し地域支配を協力し合う【2】

… 相手の家臣を引き抜き所領を広げようとする争いが背景に存在した

文明8年(1476)益田兼堯は石見国東部の有力領主高橋氏と盟約した【3】

＝ 応仁の乱による室町幕府体制の動揺への対応、と推定される

明応4・5年頃(1495・96)三隅氏内紛に益田氏ら領主が介入し解決を図った

⇒ 大内氏は領主間関係の改善をめざし、益田氏の重要性が高まった

永正7年(1510)高橋元光と益田宗兼が盟約関係を再確認した

同9年、安芸国の領主たちに高橋元光も加わり盟約を結んだ

＝ 大名大内氏などに対し団結して対応することをめざしたもの

⇒ 高橋氏は石見・安芸両国に所領をもち、両方の領主連合に加わった

⇒ 高橋氏を介して、石見・安芸両方の領主連合が形成されつつあった

■益田氏は大内氏、特に重臣の陶氏と関係を深めた

大名大内氏は周防・長門を中心に領国を多数持ち、石見国にも影響力を及ぼした
文明2年(1470)大内氏の内部分裂時、益田貞兼は陶弘護と連携し戦った

⇒ 反対派に勝利し、大内氏当主政弘は益田氏へ新たな所領を与えた

… 益田兼堯の娘は陶弘護の妻という姻戚関係があった

… 益田・陶両氏とも吉見氏と所領問題を抱え、利害関係が一致した

天文11年(1542)益田尹兼が陶隆房(後に晴賢)と兄弟契約を結ぶ【4】

＝ 互いを兄弟の関係になぞらえる約束を交わし、仲を深める

… 鎌倉時代の太刀国宗・吉宗を贈りあう、同じ刀匠作品は国宝・重文

■毛利氏は益田氏同様に連合の盟主として安芸国の有力者になり、陶氏と関係を深めた

享禄2年(1529)毛利元就は高橋氏を滅ぼし、替わって領主連合の盟主となった

3. 戦国大名毛利元就との対立から和睦へ

■益田氏と毛利氏は陶隆房の下剋上に協力した

天文 20 年（1551）陶隆房が大内氏当主義隆を自害させ、新当主を迎えた
陶隆房は、重臣や有力な領主から下剋上への了解・協力を事前に得ていた

- ⇒ 領主連合の盟主として益田氏・毛利氏は他の領主たちをまとめた
- = 益田藤兼は周布氏・福屋氏の協力を得た【5】

■毛利氏は陶晴賢・大内氏を破って大名となった

天文 22 年（1553）益田藤兼は陶晴賢とともに吉見氏を攻撃した

同 24 年、益田藤兼は三隅氏を攻撃し、三隅川河口部を攻略した

弘治元年（1555）厳島の戦いで毛利元就が勝ち、陶晴賢は敗死した

- ⇒ 同 3 年に毛利氏は大内氏を滅ぼし、周防・長門両国を支配した
- ⇒ 益田氏は所領を広げたが、大内氏・陶氏が滅亡したために孤立した

■益田氏は毛利氏と和睦し、その領国に属した

弘治 3 年（1557）益田藤兼はまず、毛利元就の次男吉川元春と和睦した

- ← 毛利元就は吉見氏と共同で大内氏を攻め、和睦に当初は反対だった

永禄 5 年（1562）毛利氏が出雲国の大名尼子氏の勢力を追い、石見国を平定した

- … 益田氏は毛利氏と連携し、尼子氏方の三隅氏を板井川城に攻めた

同 6 年、益田藤兼は相伝の刀舞草房安を贈り毛利元就と正式に和睦した【6】

同 8 年、益田氏と吉川氏は改めて盟約を交わし、協力関係を確認した

- … 益田氏と吉川氏の盟約の一段上に毛利氏が位置するかたち

同 11 年、益田藤兼父子が毛利氏の本拠である吉田郡山城へ赴いた

毛利元就が名前の一文字「元」を与え、藤兼の子は益田元祥と名乗った

益田氏は毛利氏一門や家臣へ多大な贈り物をし、酒肴を振る舞った

虎皮、北海の産物（昆布や数の子）を含む = 益田氏の経済力を示す

永正 15 年（1518）頃、小浜（福井県）に益田氏の船がしばしば着岸

益田氏は日本海水運で運ばれてきた産物を小浜あたりで入手していた

■石見の領主たちは明暗が分かれた

天文 20 年～弘治 2 年、大内氏に従っていた領主たちが次第に争い始める

- = 益田氏と吉見氏、周布氏と都野氏、小笠原氏と佐波氏・福屋氏

- ⇒ 従来 of 紛争が再燃した

- ⇒ 大内氏の衰退に替わって進出した毛利氏・尼子氏間の対立と絡む

弘治 2 年～永禄 5 年、石見国では毛利氏 VS 尼子氏の構図で尼子氏方が敗れた

永禄 2 年、尼子氏方の小笠原氏は毛利氏へ降伏し、所領が削られた

同 4 年、福屋氏は尼子氏方へ転じるが翌年滅亡し、吉川氏が進出した

益田氏はじめ毛利氏方の攻撃により、三隅氏・永安氏が滅んだ

吉見氏は毛利氏と結んで大内氏を討ち、長門国へ所領を大きく広げた

4. 毛利輝元の権力強化と益田元祥・石見の領主たち

■ 益田氏は吉川氏との関係を深めていった

元龜元年（1570）益田藤兼が元祥に家督を譲る、元祥は吉川元春の娘と結婚した

天正6年（1578）吉川元長が益田元祥と盟約を再確認し、一族同様に重視した

＝ 「益田氏らの協力さえあれば毛利氏の領国支配は安泰」【7】

＝ 益田氏は毛利氏一門や安芸国内の有力武将と肩を並べる存在

同9年、鳥取城の守将吉川経家の自害後、益田父子は経家の父へ香典を贈った

← 吉川経家は益田元祥の義兄吉川元長と親しかった

同15年、吉川元長没時、益田元祥が吉川経言（のち広家）の相続を助けた【8】

＝ 益田元祥が他の領主たちをまとめ、一同で経言に従う旨を誓った

△益田氏と吉川氏の関係からみた狩野松栄筆益田元祥像

天正7年（1579）同じ作者の狩野松栄が、吉川元長像【9】も描いた可能性あり

← 画法の特徴、吉川元長が肖像画を狩野松栄へ依頼した史料【10】

■ 益田氏は国人領主連合の盟主的性格をなお備えていた

天正10年（1582）か、益田氏と周布氏の間で婚姻関係が結ばれた

天正15年（1587）都野・周布・益田三氏が家来や百姓の動向につき誓約しあった

＝ 勝手にいなくなった家来や百姓をお互いが許さないことを誓う

⇒ 毛利氏の法に沿いつつも「相互之儀」互いに解決すると決める【11】

文禄2年（1593）戦没した周布元盛の後継者問題に益田元祥が関わる【12】

輝元近臣安国寺恵瓊が、周布氏後継者問題の相談を吉川広家に求めた

… 広家）女子が跡を継ぐ 輝元）女子は幼く、元盛兄弟が相続

⇒ 毛利元清（元就の子で輝元の叔父）と広家が相談する

益田元祥の関わり方

1) 広家は女子を後継者に推す考えを益田元祥に手紙「御捨」で伝えた

2) 元祥は輝元側に広家の手紙を示し、その意見を伝えたと推測される

3) 元祥は、輝元の意向を記す恵瓊の手紙【12】を広家へ渡し説明した

⇒ 元祥が周布氏後継者問題で輝元と広家の間を仲介した

… 元祥は周布氏や広家の姻戚であり、輝元の有力家臣となっていた

周布氏が家を継続し軍役負担できる＝毛利氏の方針に沿い問題解決

■ 益田元祥は毛利輝元との直接的な関係強化を図っていた

元祥の子の世代が輝元の親族や側近と婚姻し関係を深めた

娘は輝元側近の堅田元慶の妻、次男景祥は輝元妻兒玉氏の妹が妻【1】

慶長4年（1599）元祥は所領替えを輝元へ率先して申し出た【13】

← 豊臣政権下の大名は国内領主の自主性・地域性を否定し、集権的支配へ変化

← 毛利氏もまた所領替えによって領主の地域性を否定し権力強化を図った

… 領主の抵抗が想定される中、益田元祥の先見性が際立つ

「家臣を全て連れて行きたい」⇒軍事力維持し政局対応狙ったものか

… 結果的に益田氏の所領替えは実施されなかった

- 毛利氏の集権的支配に対し石見の領主たちはそれぞれ対応した
 - 関ヶ原の戦いまで従来の所領を維持し、のちに萩藩の家臣となった
 - … 周布氏・都野氏、三隅氏（毛利氏により復興）
 - 天正 19 年（1591）検地後に所領替えて石見国を離れ、のち一度毛利氏を離れた
 - … 佐波氏（備後国へ）、小笠原氏（出雲と長門に所領分割）
 - 軍役負担を成しえなかった時は家の存続が危ぶまれる事態になった
 - … 吉見氏、毛利氏宗家と姻戚だが文禄の役後に後継者問題が生じた
 - ⇒ のち吉川広家の次男を養子に迎える、永代家老家で毛利へ復姓した

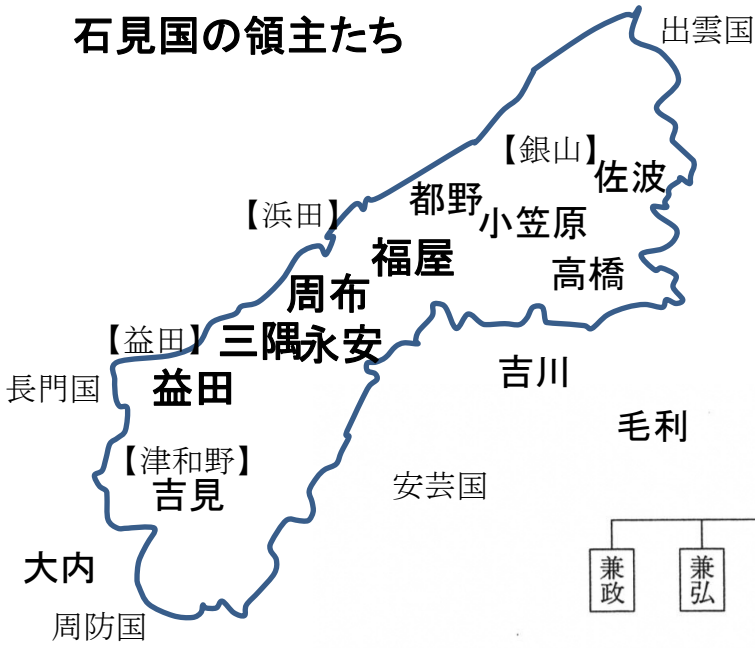
5. 「石見侍」益田元祥は毛利輝元を選んだ

- 大名格の評価を受けた益田元祥の政治力の由来は？
 - 石見国には国人領主連合の秩序があり、その盟主益田氏の役割は大きかった
 - その政治的基盤を礎に吉川氏や毛利氏との関係を築きあげ、政治的地位を高めた
 - ⇒ 当主益田元祥の政治力も相応に強かったと考えられる
 - … 江戸時代、益田元祥は萩藩の財政再建に努め、益田氏は永代家老家となった
- 益田元祥が徳川家康の誘いを断った理由とは？
 - 本人談「石見国付之者」だが毛利輝元には所領を多くいただいた恩義がある
 - 「石見侍」 = 自らが石見国で築いてきたものへの自負が背景にある？【1】

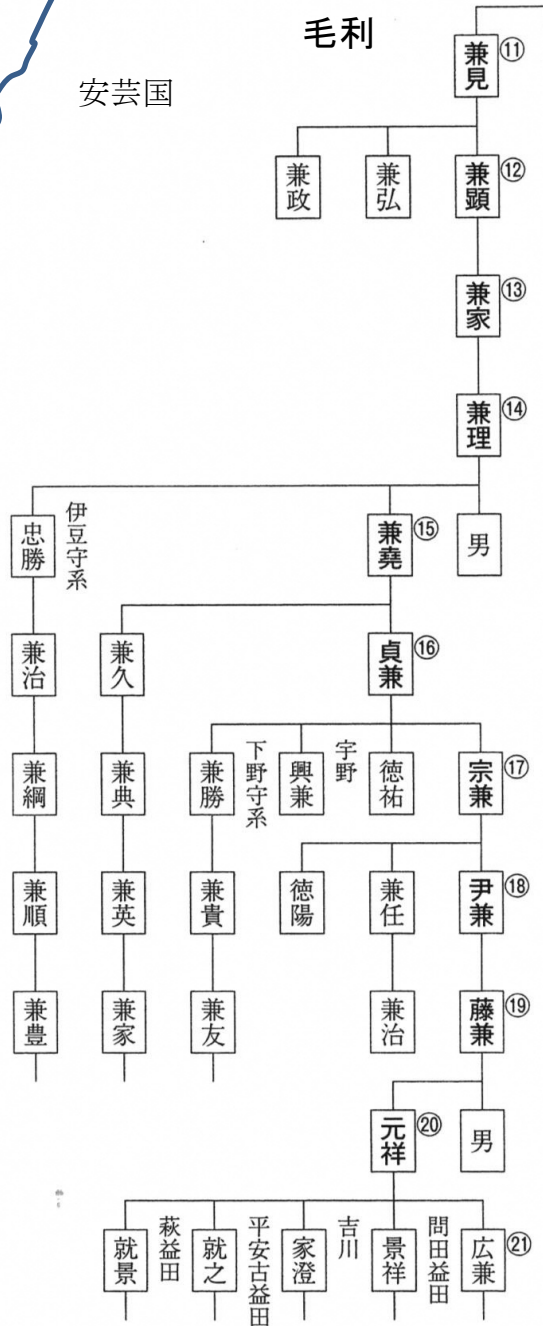
参考文献

- 井上寛司・岡崎三郎編『史料集 益田兼見とその時代-益田家文書の語る中世の益田（一）-』益田市教育委員会、1994年。
- 同『史料集 益田兼堯とその時代-益田家文書の語る中世の益田（二）-』益田市教育委員会、1996年。
- 同『史料集 益田藤兼・元祥とその時代-益田家文書の語る中世の益田（三）-』益田市教育委員会、1999年。
- 加藤益幹「石見益田氏と転封」『年報中世史研究』15、1990年。
- 影山純夫「吉川史料館所蔵「吉川元長像」」『國華』124（5）、國華社、2018年。
- 岸田裕之「「人沙汰」補考-長州藩編纂事業と現代修史小考-」および「石見益田氏の海洋領主的性格-永禄十一年の吉田毛利氏への出頭関係史料の紹介と解説-」『大名領国の経済構造』岩波書店、2001年。
- 同「石見国衆連合と大名たちの室町戦国時代史」『古代文化記録集しまねの古代文化』25、島根県古代文化センター、2018年。
- 東京大学史料編纂所編『益田家文書』一～四、東京大学出版会、2000年～2012年。
- 中司健一「中世後期石見国人の動向と室町幕府・大名」『島根県古代文化センター研究論集第18集 石見の中世領主の盛衰と東アジア海域世界』島根県古代文化センター、2018年。
- 益田市教育委員会編『中世益田・益田氏史料集』益田市・益田市教育委員会、2016年。
- 同『中世益田ものがたり』益田市・益田市教育委員会、2017年。
- 目次謙一・角野広海編『企画展石見の戦国武将—戦乱と交易の中世—』島根県立石見美術館、2017年。

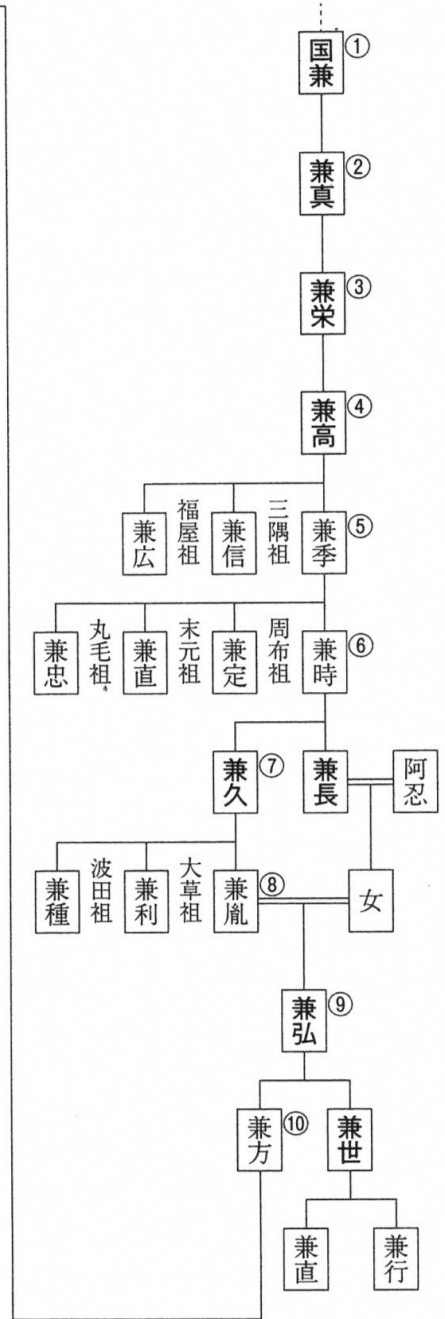
石見国の領主たち



毛利



益田氏系図



系図の出典は、
益田市教育委員会編『中世益田ものがたり』益田市・益田市教育委員会、2017年。

益田氏系図（元祥の子供の世代まで。一部省略。系図をもとに近年の学説を踏まえて作成。丸数字は一般に言われる益田氏歴代当主の代数。太字は益田（藤原）氏当主であったことが史料で確認できる人物。）